

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月27日現在

機関番号：32643

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02086

研究課題名(和文) 生命創発の形而上学的諸問題に関する比較思想的研究

研究課題名(英文) Studies of Comparative Thought on the Metaphysical Problems Concerning Life Emergence

研究代表者

冲永 荘八 (OKINAGA, Shohachi)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：80269422

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：意識の創発、生命の創発など、創発には無いところから有るものが生じる、という不可解が伴っている。しかしそれは見方を変えると、創発とは、それまでの概念的なカテゴリーには入らなかったものが、観察者の関心事になることで生じる事態と見なすことができる。実際、意識は脳細胞を観察していたカテゴリーには入らず、両者を同じカテゴリーで扱おうとすることはカテゴリー錯誤である。そして、創発の不可解とは、別々のカテゴリーの事柄を、同じカテゴリー内の因果関係によって説明しようとするから生じるというのが、本研究課題全体から導き出された結論であった。この観点から、生命、生気、AIなどについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、創発という出来事が、事物そのものに属するのか、それとも私たちの概念の枠組みに属するものなのか、という問題に対して後者の立場を明確にしたことである。その学術的意義は、物質や意識、生命と言われる自然を把握する際の最も基本的な概念が、自然そのものではなく、私たちの側に大きく依存している事実を示した点にある。それらが自然に属すと考えるから、創発という発想になるのである。そして本研究の社会的意義は、自然主義と言われる場合の自然さえ、暗黙のうちに機械論的、三人称的世界だと考えられていることに対して、自然が私たちの把握を超えた奥行きを持っている事実を示した点にある。

研究成果の概要(英文)：As we see in the emergence of consciousness or in that of life, emergence seems to have a mystery concerning the creation of being from nothing. However, from another point of view, we can regard emergence as an event in which something outside of the observer's conceptual category so far becomes the object of his concern. In fact, it is a category mistake to observe consciousness and brain in the same category, because consciousness doesn't apply to the category in which brain cells have been observed.

Thus, it is the conclusion of this research that the mystery of emergence is brought about from our propensity to explain events belong to different categories by the causal relations in the same category. From this point of view, we have examined life, the vital and artificial intelligence etc.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：創発 物質 意識 生命 カテゴリー 自発性 進化 量子論

1. 研究開始当初の背景

- (1) 延長と三人称の性質の内であり、決定論的で予測可能な物質から、一人称の性質を持ち、自発的に振る舞い予測不可能に思われる生命はどのようにして登場したか。これは哲学上重要な問題だった。それは、無いところから有るものが生じるという問題に直面しているからである。因果律からはみ出すと思われるこの問題をどう考えるかで、長年様々な立場が登場してきた。
- (2) 物質の法則と生命の法則が異なり、後者を説明するために19世紀から20世紀の半ばころまで「生氣」が考えられていた。それに対する物理主義的立場からは、20世紀後半にプリコジンの「自己組織化」などが登場した。それらは物質の性質を拡張する試みだった。意識についても、機能主義やAIの隆盛は、物質の性質の拡張によって意識を説明する点で共通している。

2. 研究の目的

- (1) 物質の性質から生命が登場すること、有機物の中から意識が登場すること、事物の無意味な配列から意味が登場するといった創発の現象を、存在の不可解に陥らずにいかに説明できるかを考察することを目的とした。
- (2) 物質から生命の発生、物質から意識の発生を考える際、生命や意識のように無から創発されたかのように見える性質は、それらの把握のために私たちが新たな概念やカテゴリーを用いるがゆえに、それらが無化ら創発されたかのように思われる、という着眼点から研究を行った。

3. 研究の方法

- (1) M・ポランニなどの代表的な創発論者の見解と、C・マラテールなどの創発を物質への還元主義的な立場から扱おうとした立場とを対比させ、両者の問題点を明確にした上で、創発という現象が私たちの側の概念枠の切り替えによって生じていることを明らかにする。
- (2) 量子論においては、「収縮」とは量子状態から古典の状態へ移行することとされ、それらの性質は「収縮」前後で異なっていると考えられている。しかしこれは、私たちが物質の基本状態と考える古典的状态さえ、それより基本的な状態から生じてきた証であることを明らかにする。
- (3) さらに、古典的状态という規定さえ、物質そのものに属しておらず、私たちの概念枠によって物質を役立たせやすいように作り直した結果の、近似的な状態にすぎないことを明らかにする。むしろ正確には物質はすべて量子的状態であり、それは私たちの概念枠を通じて映し出される、物質と意識、決定論と自発性といった対立が未分の状態であることを示す。

4. 研究成果

- (1) 肝臓でアルコールがアルコール脱水素酵素の働きでアセトアルデヒドに作り変えられ、さらにアルデヒド脱水素酵素の働きで酢酸にまで変化する過程において、酢酸はその組成物質が無いところから作り出されるのではない。その分子を形成する様々な元素の主なものは、アルコールの中にすでにあり、それが水素を除去されたりする分解を繰り返しながら酢酸にまで至るのである。当然、この過程に関係したすべての物質の原子量は変化しない。

それに対して、脳が意識を産出すると考えた場合、脳を形作る分子がどのように変化して意識になったかは説明がつかない。意識は脳細胞を構成するアミノ酸分子からできておらず、それらが化合や分解を繰り返して意識になるという因果的な説明はできないからである。当然、特定の意識が生じている際の脳細胞で分解されたブドウ糖の分子量と、生じた意識の分子量を比較することなどもできない。このように、意識は脳細胞と存在様式がまったく異なり、脳細胞が三人称的に存在するのに対して、「私」の意識は一人称的にしか接近できない。三人称的なものから一人称的な何かが登場するのは理由がなく説明ができない。ここに創発が因果的な説明不可能性に結びついていることが見て取れる。

このように、創発には、無いところから有るものが生じる、という不可解が伴っている。しかしそれは見方を変えれば、創発されるものとは、それまでの概念的なカテゴリーでは捉えられなかったものが、観察者の視野に入ってくることによって生じていると推測することができる。実際、主観的な意識は脳細胞を捉えていた、客観的事物を捉えるカテゴリーには入らない。もともと別々の存在様式を持つものを、同じカテゴリーで扱おうとすることはカテゴリー錯誤である。しかし、創発の不可解とは、別々のカテゴリー内の事柄を、同じカテゴリー内の因果関係によって説明しようとするから生じていると考えられるというのが、本研究課題全体から導き出された結論であった。実際、因果関係とは同じカテゴリーの事柄同士でしか成り立たないのに、互いに別々のカテゴリーに属す事柄の間にそれを見出そうとするから困難が生じるのである。

では創発という出来事をどのように捉えるのか。それは、あるカテゴリーを通じて事物を捉えてきたところに、別のカテゴリーによって有効に捉えられる状態が顕著になってくると、私たちは後者のカテゴリーを通じて事物を見るようになる。そこに現われた事物は、それまでのカテゴリーには無かったので、それを創発された事物として思い込むと考えられる。つまり、事物そのものを観察できるなら、そこには何も「新しい」ものは登場していないが、それを捉える私たちの側のカテゴリーの変更が、見方の変更を私たちに創発として思わせているということである。

ここで注意する必要があるのは、今しがた便宜的に「事物そのものの」と記した状態は、私たちが考えている「物質」の状態でさえないことである。「物質」とはすでに私たちのカテゴリーを通じて表出された現われにすぎないからである。現に「物質」は三人称的であり決定論的な存

在者であるが、これは意識や主体も含めた、世界に見出される様々な存在様態のひとつにすぎない。このように私たちへの現れは、「事物そのものの」の一面を表出するにすぎず、そこへ私たちはどこまでも追いつけない構造の中に置かれている。したがって「事物そのものの」とは、それ自体、私たちにとっての現れの性質をすべて潜在的に含むものと言うことができ、またどの性質もそのままの形では含んでいないとも言える。そして、その「事物」は一定不変とは限らない。それが「实在」の状態だと考えられる。

(2) 以上のような見通しに、4年間の本研究課題の遂行の中から行き着くに到った。次にこの見通しに到った遂行の過程を確認したい。

まず2015年の6月には、比較思想学会のパネル「思想としての生命」の2年目として「生命概念の再検討 生きているとはどのようなことか」を企画した。この中で本研究代表者は、「創発と生命概念」というタイトルの発表を行い、物質の機械論的、無目的な性質と、生命の目的論的な活動との狭間に創発が位置し、この目的論的、自発的な活動が物質には見られない性質でありながら、生物学の内部では前提として扱われている事実をまず確認した。しかしそうすると、生物学は物理主義に立ちながら、物質にはない別の性質が生じているのを認めていることになり、これは哲学上の問題として考察する必要があると考えられた。

これに関して、まず文字通り創発を認める立場を検討したが、それは無いところから有るものが登場することを認める立場であり、そこに合理的説明の限界点が見出された。次に機械論的な還元主義であるが、ここから生命活動の目的性や自発性、内面性の説明には困難があることが見出された。また機械論に対して生氣論を唱える場合でも、機械論とは全く性質の異なる立場が別個に唱えられてしまう事態になり、またその生氣なるものの正体も問題化することを確認した。一方、機械論自体をすでに限定を受けた立場と見なし、限定以前の実在を未だ決定論的、三人称的存在者には限らないものと見なす立場についても吟味したが、これは機械論や生氣論に比べて不合理な点や、説明できない問題点が少なく済むことを見出した。

創発に関して、2015年度の研究課題のひとつに、粒子的単位の運動の合成である「上方因果」とは別に「下方因果」を認めるか否かという問題があった。「上方因果」しか認めないのであれば、物質はどこまでも粒子的単位の合成と考えられるが、「下方因果」は粒子的単位の合成のみで物質の力関係は尽くされず、ある一定の物質のまとまりが、粒子的単位の運動の合成とは別の因果を作り出すという考えになる。反対から見れば、「上方因果」のみとする考えがすでに、粒子的単位を唯一の実在とする前提によって可能になることになる。これは、さらに物質からの意識の生成、客観性から主観性の生成などの創発問題のみならず、客観的な物質同士でも創発が問題化し得る事柄があることを意味している。

「下方因果」が可能か否かという問題は、いかに機械論的因果性とは異なった世界把握が可能であるか、という議論に収束する。生物の目的的行動、意識の性質、一人称的世界すべてがその世界把握につながっている。その意味で、因果の「上方因果」への限定は、これらの世界観を排除した枠組みの中で初めて成立するにすぎないことになる。

しかし、機械論的因果性を前提とした上で、かつ「下方因果」を認めようとする議論はいくつか存在する。たとえばフィリップ・クレイトンなどは、この議論に関して、粒子の単位には見出せない、システム自体の持つ因果性について論じている。そこでは、個々の粒子同士の運動の伝達より速く伝わる、システム全体に起因する伝達が扱われる。さらにこの単位粒子の運動には還元できない、システム全体の持つ力や現象の問題は、プリコジンが論じた自己組織化などの、無秩序から秩序の発生という事態にも関与して行く。自己組織化とは、単位粒子の「存在」を前提とした上で、粒子同士の運動には見出せない「法則」が生じることとして見なすことができる。しかしそこで、単位粒子の機械論的運動のみが唯一の実在で自己組織化はその複合にすぎないのか、それとも自己組織化は粒子の機械論的運動に還元されない、システム自体に内在する性質なのかについては、さらに考察しなければならない。

また、原因を追究するとさらにその原因が問われるという論究の形式についても考察する必要があった。それは、「上方因果」にすべての運動を還元するような、近代の科学に特徴的に見られる考え方では、一旦出来上がった世界の運動については非常に整合的な計算ができる一方、「上方因果」としての粒子の運動の始まりはどこから来たかについては、答えられないからである。このように「上方因果」は最小の粒子への、实在性の集中によって生じる。すると、より小さいものほど实在性が高いという考え、つまり「尊小主義 smallism」は、何を以って正しいとされるのかという疑問も生じる。これに関して、粒子の機械的運動に实在性を集約させることと、「尊小主義」の成立経緯およびその妥当性について、根本的に考察し直すことも課題となる。

この存在論に対して、「下方因果」を認めることは、实在性や運動の根拠を小さいものに限定しない考え方を認めることでもある。それは、「上方因果」のみを認める見方からすれば、得体の知れない力の創発になるだろう。しかし見方を変えて、「尊小主義」に意義を認めない立場からすれば、「下方因果」承認の立場は世界の全体に实在性を認め、かつ粒子の運動の最初の始まりという問題の袋小路に、直接には陥らない道筋にもなる。

自己組織化や目的性、下方因果について、T・クレインは「性質」の創発として見なした。それは、まずは粒子の「存在」とその機械的運動を基本「性質」と見なすことで、そこにはない「性質」が創発の意味を獲得するからである。これに対して、世界を不可分なものと見なす立場は、粒子単位の機械的運動の方を抽象と見なすだろう。この問題は、粒子説と、ジェイムズやベルク

ソンのような不可分な流れ全体を実在と見なす立場との対比を通じて考察する必要がある。

(3) そこで「下方因果」を認める立場を、機械的因果がすでに実在の限定である、という見地から吟味しようと試みた。この見地は、機械的因果も無条件で成り立つのではなく、一定の論理的枠組みの中で可能になる、実在の抽象化の結果であるという考えに立脚している。それは意味論的、論理的観点から、機械的因果さえも一定の意味論的条件の中で初めて可能になる思想として扱う立場である。そこでは機械的因果も一種の形而上学的な立場ということになる。

しかし、専ら意味論的な観点以外でも、機械的因果をすでに限定されたものと見る立場もある。それが量子論的なレベルでの非決定性の観点から、原子レベルの古典的、機械論的決定性を見直そうとする立場である。もっともこれも、機械的因果さえ自らの古典的文脈の中で成り立つにすぎないと見る点で、機械的因果を意味的に限定された出来事だと見なす立場のひとつではある。

さて、古典的な原子レベルの基本粒子の機械論的因果性が前提だと、「下方因果」のようにシステム全体による原因性が唱えられても、基本単位の力の合成以外の原因性を考えることができないという反論は残る。これに対して機械的因果がすでに下位の運動の合成にすぎないと考えることは、機械論的因果という前提を覆すという意味で、注目に値する。そして研究計画書でも触れたヘンリー・P・スタップによる「量子ゼノン効果」の考察は、機械的因果性も実在から立ち上がるひとつの状態にすぎないばかりでなく、量子レベルにおける物質の状態が、心的状態の介入によって変化する事態に、具体的に着目した点でも注目に値する。

決定と自由の対立という問題と、物質と精神の対立という問題は、哲学では異なった議論として扱われることが多い。しかしスタップの議論は、決定されているはずの物質の古典的状态に、自発的な意識が量子状態においてすでに介入している事態を示すことで、両方の問題を同時に射程に収めている。ただし哲学の分野でも、これら二種類の対立はともに、無限定の状態からの限定が起こることで、二組の対立が生じてきたと見なす立場がある。たとえば西田の場所の思想はこれらの二組が対立する以前の無限定を論理的に示している。すでに世界の様々な限定と枠組みの中にある私たちには容易にたどり着けない「絶対無」は、それらの枠組みが全面的に未成立の状態に相当する。そこから見ると、スタップのように古典的な物質状態に主観的観察が介入していることの指摘は、決定論の枠組を具体的にはがす試みとして特徴づけられる。

(4) 決定論と自由意志の断絶は、物質と意識との断絶に密接に関わっている。ここには、物質から意識が生じたのは創発なのか、それとも決定論的で3人称的な物質の性質と、自発性を持ち1人称的な意識の性質とは、私たちが両者の性質を区別する認識枠を持つため、断絶して見えるにすぎないのか。つまり両者の性質を断絶させているのは、それぞれの性質を断絶させて把握する、私たちの側の枠組みに起因するのか、という問題がある。結論的に述べると、本研究は後者に妥当性があると考えられる。

この問題意識から、物質と意識を断絶させず、両者を連続的關係の中でつなごうとする試みについて考察した。そこで決定論的で3人称的な物質にも量子レベルの計算不可能性があり、それが意識の自発的で1人称的な性質に関与しているから見なす立場のいくつかに着目した。決定論的な基本的粒子の「存在」を前提とする限り、この「存在」が複合したシステム独自の自発性があり得ないという見方がある。それに対して、決定論的に見える基本的粒子自体が実は意識的な何かの介入によってその運動が定められて行くのだとすれば、物質の決定性と3人称的存在者については、根本的なレベルから考え直されなくてはならない。

そこで量子レベルの現象の計算不可能なランダム性から、意識の世界全体への関与を導く理論が、創発に関わる哲学的議論をどう扱ったかに着目することを続けた。これは量子レベルでは物心に関して両者を区別できないところがあることを否定しない。その意味で物質や精神以前の中立的で一元的実在から物心が分かれるという、哲学史上の見解にも共通するところがある。

この物心の構図に関して、量子状態が脳内のマイクロチューブルの中で計算不可能な「収縮」を起こすことで意識が発生すると唱えたロジャー・ペンローズは、この「収縮」を物質と意識との間をつなぐものとして位置づけているが、物質と意識とを分けた上で前者から後者が生じるという考えは、いまだペンローズの前提になっている。一方、スタップにおける量子状態の主観的選択の思想の出所になったフォン・ノイマンの考えでは、量子状態を選択する意識がその状態とは最初から別に考えられている点で、物質が意識に変化するという考えはなく、しかも意識が物質とともとも相互作用することが前提になっていると言える。

反対に、スタップやノイマンでの量子状態の選択における、主観性の扱い方を批判したダンコ・D・ジョージーフは、この主観性が物質状態から不自然に遊離した得体の知れないものになることを批判した。さらにマックス・テグマークは意識が生じる説明に、量子論を持ち出すこと自体を批判している。しかしノイマンらの考え方はミクロな次元での、因果性の法則自体のゆらぎに着目しており、古典的状态のみの世界を仮定した場合に問題となる、最初の原因をどう考えるかという問題に対して示唆的な見解を呈示していることも確認した。

さらにそれらに対して、物質から意識が生じるのではなく、原初から意識の遍在を唱えるデビッド・チャルマーズや、唯心論物理学を展開した中込照明になると、物質と意識との相互作用だけではなく、意識と物質とが一体になっている傾向がより強く見出される。これらの思想では、物質と意識を分けるから、なぜ前者から後者が生じるか、なぜ両者が相互作用するかという問題が生じるのであり、両者の区別がなければ最初から問題は生じないことになる。

このように、意識のない所から意識が生じることと、原因のないところから運動が生じるとい
うのは、パラレルな問題である。確かに、スタップやノイマンの中では、量子選択を行う主体の
出所が不明であるという問題があった。しかし、意識主体がなければ、何が意識を作るのかは問
題として残ってしまう。ペンローズにおける意識発生の場合としてのマイクロチューブルと、そこ
での「収縮」という考えでも、なぜ量子状態の「収縮」が意識を発生させるのかが未解決に残っ
てしまう。彼らに共通する問題点は、意識発生という考え方の中にある不可解な点を洗い出し、
むしろ意識を基本的、普遍的実在と見なす考え方に妥当性があるという見解に説得力を持たせ
た。これは、本研究のテーマである、創発という、無から意識が生じるという構図に対して再考
し、また創発が無知の産物であるという批判に対しても一定の反論を可能にするものだった。

これに関して、意識を創発されたものではなく、もともと「基本的語彙」として実在に遍在的
に伴って考えるべきものと見なす立場として、上記のようにチャルマーズの見解を再確認した。
また量子状態と古典的状态との根本的区別を批判し、「収縮」の際の主観的選択を、孤立したも
のではなく遍在的なものと見なす、唯心論物理学の利点をも確かめることができた。

さらに決定論に対する意識の自発性に関しては、決定論自体が無前提ではなく、自らの形式の
及ばない地点を持つことについては、南部陽一郎の「自発的対称性の破れ」を参照した。この「破
れ」とは、ある基底状態と保存則とが支配する世界が、それらの法則が未成立の状態から生じて
きた出来事を示す概念として理解できる。つまり一定の系を支配する法則には、その法則自身か
らは導き出されない始まりの地点があり、その地点で「破れ」と呼ばれる出来事が生じ、それが
「自発的」と形容されたのだった。

(5) このように法則も「自発的」に創られたと考えることは、世界を単純で客観的、粒子的な「存
在」の集合と見なすことを不可能にさせる。単純な「存在」は、一定の法則内でその単純性を獲
得するにすぎないからである。実際、古典的な運動を行う粒子的単位は、その運動の決定性を古
典的な法則が妥当する空間でしか獲得できない。つまり決定論的世界の基本単位は、決定論が未
成立の世界では基本単位たり得ない。すると古典的、決定論的世界はすでに限定を受けた世界で
あり、原初の世界からすれば客観的、粒子的状態ですえすでに限定の産物であることになる。

反対に「無限定」の状態は、論理の枠組みをすべて外すことを条件とする限り、それを直接に
把握することは非常に困難である。しかしこの「無限定」は、始原の問題、つまり無いところか
ら有るものが生じる、という問題を扱う際に示唆的な役割をする。「無限定」は、何か有るもの
が登場すると、そのさらなる原因が問われてしまう、という遡及的な問いの形式を無効にさせる
働きがあるからである。始原を問うこの形式がなければ、その問いが無意味になり、始原の謎も
生じない。たとえば西田の言う「場所」や「純粹経験」の起源は何かと問うのが無意味なもの、
有るものの起源を問う形式がそこではすでに成り立たないからである。

そしてこの着眼点を、創発説における「無からの創発」と、中立一元論の特徴となる「無限定」
からの世界成立との対比に応用させた。創発説における「無からの創発」は、因果の未成立、さ
らに時間の未成立段階からの創発までを含むのに対して、「無限定」には時間の未成立という意
味は薄い。実際、「無限定」の思想を展開した西田にとって、始原の問題は中心的な課題ではな
い。つまり、直線的な因果連関の始原と、非直線的な「無限定」という問題意識の違いが、創発
説と中立一元論との違いを形づくっている。その違いに切り込む試みとして、西田的な「無の場
所」から、因果律と時間とをどのように扱えるかを探った。

そこで無の場所の「無限定」の性質を、宇宙創出の「原始偶然」を正面から取り扱った九鬼周
造の議論と対比させることで明らかにした。九鬼はそこで「原始偶然」を必然性からの逸脱の極
みとして位置づけたが、それは決定論が自らとは異なるものに立脚せざるを得ない、という思想
を示している。つまり必然性の連関の世界が偶然性と鋭く対立しながら偶然性に立脚せざるを
得ないのと同様に、決定論もその因果連関の先端において、決定論と対立する状態に直面せざる
を得ないのである。ここで決定論は「原始偶然」を通じて、「無限定」に直面する。

(6) 物質から意識の創発という問題に関して、生命と生命ではないものとの境界を、人間の意識
内容をコンピュータにアップロードする試みを題材に考察した。具体的には、生きている人間の
記憶や習慣などの内容をAIに保存し、それを備えたロボットによってその内容を出力させるこ
とで、もとの人間と同じ行動、言語活動などを可能にさせる試みである。これは意識の死後存続
をはかる試みでもある。ここには、意識とはアップロード可能なデータに還元されるか、という
根本的な問題が横たわっている。

意識内容のアップロードでは、記憶や習慣などの私の意識の情報の保存が、私という主体を保
存することになるのか、という問題があった。しかし、生身の人間においても、意識とその主体
とは区別ができず、何が私という主体なのかは不明である限り、頭蓋の中で用いられる記憶情報
と、コンピュータ内で操作される情報とは本質的に区別できないという考えも妥当性を持って
いた。しかしそれは人間をAIのような機械の機能に還元するのではなく、反対にAIの方を意識
の観点から眺め返す、つまり様々な機械の機能や情報の方に、意識に付与されている性質を読み
取り得ることを意味していた。それは世界の全体を情報の空間として捉えた場合、そこにどこま
で意識と類似した性質を読み取ることができるか、ということにもなる。これも物質と意識、物
質と生命との連続と不連続に関する問いである。

研究期間全体を通じた成果として、物質と意識、非生命と生命との断絶を決定的なものとし

い複数の観点から、考察を行うことができた。物質からの生命創発に関しては、物質にない別の何かが生じるのではなく、両者は連続的であり、便宜によってふたつを分けて世界を説明する概念枠が、それらを断絶させていると考えることができた。また生氣論に対しても、物質とは別の生命の素因が存在するのではなく、物質現象を説明するのに便利な法則と、生命現象の説明のための法則とを私たちが区別して持つゆえに、物質とは別の生氣が考案されたと考えられた。さらに生身の人間の意識の情報と AI にアップロードされる情報も、それぞれ異なったコンテキストで見るゆえに区別されるのであり、実際はそこに共通した性質も多く含まれることが確認された。これも生命と非生命との連続性の視点から反省できる成果であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

冲永宣司「始原の『驚き』と『自然』 - 九鬼周造の『原始偶然』と南部陽一郎の『自発的対象性の破れ』」『帝京大学学修・研究支援センター論集』査読有、vol.10、2019年3月、pp.1-18.

冲永宣司「身体の死後に意識を存続させる試みについての哲学的考察」『人間存在論』査読有、第24号、京都大学大学院人間・環境学研究所『人間存在論』刊行会、2018年7月、pp.33-46.

冲永宣司「超越的次元のゆくえ 宗教経験の脳神経科学をふまえて」『宗教哲学研究』査読有、35巻、宗教哲学学会 2018年3月、pp.13-27.

冲永宣司「多元的宇宙間の断絶と連続」『近世哲学研究』査読有、第20号、京都大学近世哲学史懇話会、2017年3月、pp.93-109.

冲永宣司「量子論から意識へのアプローチ 主観、自由、原因のゆくえ」『帝京大学総合教育センター論集』査読有、第8号、2017年3月、pp.1-22.

冲永宣司「生死の矛盾をつなぐ生命」『比較思想研究』査読有、第43号、比較思想学会、2017年3月、pp.61-66.

冲永宣司「人間原理と始原への問い」『帝京大学総合教育センター論集』査読有、第7号、2016年3月、pp.1-25.

冲永宣司「創発と生命概念」『比較思想研究』査読有、第42号、比較思想学会、2016年3月、pp.52-57.

〔学会発表〕(計 10 件)

冲永宣司「プラグマティズムにおける真理の確定不可能性の根拠について」日本宗教学会第77回学術大会、於大谷大学、2018年9月。『宗教研究』第92巻別冊 第77回学術大会紀要特集 pp.180-81に要旨掲載。

OKINAGA Takashi “On the Premises of Naturalistic Views of Life,” 24th The World Congress of Philosophy, at China National Convention Center, Beijing, 17, Aug., 2018.

OKINAGA Takashi “ ‘Originary Event’ and ‘Spontaneous Breaking of Symmetry’: The Attitudes of Kuki Shuzo and Nanbu Yoichiro toward the causal Law”, The Third Conference of European Network of Japanese Philosophy, at the Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Paris, Nov. 3, 2017.

冲永宣司「『私』を肉体の死後も存続させる試みについての哲学的考察」日本宗教学会第76回学術大会、於東京大学本郷キャンパス、2017年9月。『宗教研究』第91巻別冊 第76回学術大会紀要特集 pp.202-03に要旨掲載。

冲永宣司「超越的次元のゆくえ 宗教経験の脳神経科学をふまえて」(招待講演) 宗教哲学学会第九回学術大会、於京都大学吉田キャンパス、2017年3月。

冲永宣司「創発説は決定論と自由意志との対立をどのように扱ったか」日本宗教学会第75回学術大会、於早稲田大学戸山キャンパス、2016年8月。『宗教研究』第90巻別冊 第75回学術大会紀要特集 pp.380-81に要旨掲載。

冲永宣司「生死の矛盾をつなぐ生命 3年間を総括して」比較思想学会 第43回学術大会、企画パネル「死をめぐる生命」、於関西大学、2016年6月。

OKINAGA Takashi “Metaphysical Contradictions and the Plurality of the Universe”, Society for the Advancement of the American Philosophy, in APA Central Division Meeting, at Palmer House Hilton, Chicago IL, USA, 2016,3.

OKINAGA Takashi “The ‘Logic of Basho’ of Nishida Kitaro and the Question about the Beginning: Contrasting with ‘Original Chance’ of Kuki Shuzo.”, XXI International Association for History of Religion World Congress, 2015, 8 at Erfurt University, Germany.

冲永宣司「創発と生命概念」比較思想学会 第42回大会 企画パネル「生命概念の再検討 生きているとはどのようなことか」於東洋大学 2015、6

〔図書〕(計 1 件)

冲永宣司『始原と根拠の形而上学』北樹出版 2019 A5 452pp.